

GAZETTE

1983.7
vol.3
Number.10

※ガゼットは“
テレビと子ども”
のデータベースです

発行 子どものテレビの会(FCT)神奈川県葉山町長柄1601-27 責任者 鈴木みどり

編集 FCT資料室 銀行口座 第一勧業銀行返子支店(普通預金口座1425785)

購読料 年間(四回発行)¥1,500(送料¥240) 一部¥400 郵便振替口座 東京9-84097

■特集1

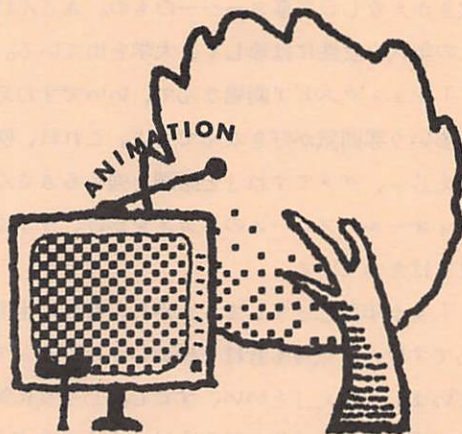
老人とテレビ

——アニメ番組の場合——

アニメは老人と孫の絆

老人とアニメ番組とは、もっとも似つかわしくない取りあわせである。「どんな番組が好きですか」と聞かれ、「アニメですね」と即座に答える老人はまず、いないだろう。実際、私が多くの老人にインタビューしたときも、「よく見る番組を3つあげてください」といってようやく最後に出てきた次第。それも、わずか2人である。回答の多い番組は「ニュース」の325人、「時代劇」の162人、「スポーツ」の110人。

反対に少ないのが「劇場用映画」の30人、「演芸、コント」の15人、「アニメ」の2人であり、「アニメ」と答えた老人の少ないことがきわだ



ている。そもそも、「アニメ」といったのでは老人には通じない。「マンガ」といわなければいけないところに、老人にとってのアニメ番組の位置づけが示されている。

Aさん(女、66歳)はいう。

「わたし専用のテレビを持っていますけど、まあ、家族と一緒に見ることが多いですね。夕方なんか、〈サザエさん〉とか、〈ドラえもん〉なんか孫と一緒によく見ますよ。そりゃあ、特におもしろいとも思いませんけどね。孫ですよ。孫がおもしろ

CONTENTS

○特集1・老人とテレビ……………	1
○特集2・メディア教育の勧め……………	4
○「テレビと行動」邦訳・出版のお知らせ……………	5
○fet インタビュー・岩佐京子氏……………	7
○fet フォーラム記録 子ども番組の制作者に聞く……………	8

○ACCESS 中国で出会った子どもたち そして、テレビ……………	10
○ケース・スタディ 横浜市T幼稚園の場合 一視聴日記をつけてみた母親の感想……………	11
○海外ニュースフラッシュ……………	12
○FCTデータベース 海外篇……………	13
国内篇……………	15

がっているのを見るのが楽しいんです。同じものを見てれば、孫との会話はずみまますね」

Aさんは、夫とは別居し31年になり、現在は息子夫婦と孫と一緒に暮している。健康がすぐれず病気がちなせいか、家にいることが多く、自然に家族とのコミュニケーションに気を配るようになっていく。孫を手なづけるには、なによりもまず、孫の好きな番組と一緒に見るということのようだ。

本当にAさんが見たいと思っている番組は、「ドキュメンタリー」とか「洋画」である。それも、吹きかえなしの字幕スーパーのもの。Aさんは、この年代の女性には珍しく、大学を出ている。

「シェイクスピア劇場なんて、いいですねえ。ああいう雰囲気が好きなんです。これは、吹きかえじゃ、ダメですね」と語調を強めるAさんはディオールのフレームのメガネをかけ、うすく頬紅をはたいている。

「もう年をとってしまったから、身体はもちろんですけど、気持ちも昔ほど機敏じゃなくなってしまいましたねえ」といい、すこし淋しそうに笑う。

一方のBさん(男、68歳)は、本人自身が「アニメ」をおおいに楽しんでいる。「《名犬ジョリイ》はいいですねえ。ほのほのとして、温かい、とてもいい番組ですよ。初めから、欠かさず見つけてます。人間愛にあふれていて、見ると気持ちが明るくなりますね」と恰幅のいいBさんが目を細めてほめちぎる。

元小学校の校長だったBさんは、いいと思えばさっそく、孫に電話し、《名犬ジョリイ》を見るようにすすめる行動派。教育の場はなにも学校だけに限らないというわけだ。

それ以来、小学2年生の孫と68歳のBさんとの間にはアニメ番組を通じて一種の仲間意識が芽ばえはじめる。

「いったい何してるのかと思ったら、孫と電話でアニメの話ですからね」と横から奥さんがアイの手を入れる。Bさんは目下、夫婦水入らずの生活を楽しんでいる。とはいえ、気になるのは離れて住む息子の家族。なかでも、小学2年の孫については気がかりなことが多い。暴力シーンの多い

アニメ、乱暴なことばづかいを好み、そのマネをすることが男らしいことだと錯覚しているふしがあるのだ。

「テレビはこわいですね。とくに幼い子どもへの影響という、もう、すごいものですよ」Bさんの口調にはおもわず熱がこもる。

「でもね、私は、テレビを消しなさいとはいいません。大人から見て悪い番組を、子どもは必ずしも悪いとは思っていないですよ。だから、私は、子どもに何がいいか悪いかの判断力をしっかりと身につけさせることの方が大切だと思ってますよ」

元教育者だっただけに、頭からテレビを否定しない。「問答無用」の姿勢で子どもからテレビを取りあげてしまう親の態度の方が、「悪い」番組を見ることよりもなお、よくない、というのである。

子どもに自分の頭で考え、判断できる力をつけるには、大人も一緒になって子どもの見ている番組を見、感想をのべることだという。それも本当に感じていることをいうのが一番いい。

「最近、孫もヒューマンなものがあるようになりましたね」と、Bさん。ところが、そうなった時には今度はBさんがアニメ番組に取りつかれてしまった、という次第。

このように、Aさんにしても、Bさんにしても、老人がアニメ番組を見ることへの背景には、教育のためであれ、孫と親密なコミュニケーションをもつには、なによりも同じアニメ番組を見ることが有効なようだ。

老人と孫という、年齢差のある二人が世代を越えて対等にコミュニケーションをもつには、アニメ番組はきわめて重要な役割を果しているのである。

アニメで道徳教育を

さて、老人はアニメ番組をあまり見ないが、意見だけはおおいにいう。

「最近のテレビを見てどう思いますか」とたずねると、意外にアニメ番組に対するものが多い。「戦争や暴力シーンの多いのがイヤですね。マネ

されると困りますよ」とか、「エッチなのがあるでしょう。子どもが見る番組ですからね。なんとか考えてもらわないといけませんね」とか、「だいたい、ロクな番組がありませんね、一休さんや昔話みたいなのをもっとふやすといいと思います」など、否定的な意見が多い。

老人が評価しているアニメ番組は、《まんが日本昔ばなし》や、《一休さん》のような一種の教訓ものである。

老人の多くはやはり、あれをしてはいけない、これをしてはいけないと説教したいのだろうか。人生訓をたれているようなアニメ番組が好きなのである。それに、とくに、《まんが日本昔ばなし》のように、画面に動きが少なく、色彩もおさえてあり落ちつきのあるアニメ番組は、老人自身の気持ちを和らげるようだ。

アニメ番組をよく見るとは答えなかったが、Cさんは、《まんが日本昔ばなし》は大好きだという。「あれ見てると、小さい頃、おふくろに添い寝してもらって昔話を話してもらったのを思い出しますね」という。

62歳になるCさんは、とくに、あののんびりとした語り口がいい、というのである。

たしかに、《まんが日本昔ばなし》は、昔から現代に至るまで、親から子へ語り継がれてきた素朴な味わいを損わずにアニメ化されており、一度でも見たことのある老人は評価することが多い。

映像、音声、内容とも、老人の認識システムにあっているのである。

さて、それでは、老人はいったい、どんなアニメ番組が望ましいと思っているのだろうか。

いくつか出された意見のうち、もっとも多いのが、「子どもの道徳心を養うようなものがいい」というのが7人。次に、「家族、親子の情愛を扱ったものがいい」というのが3人。「どんなことがあってもくじけず、最後には立ち直ってがんばるもの」、「子どもに、人生について考えさせるようなもの」、「子どもも大人も一緒に楽しめるもの」、「子どもに夢を与えるようなもの」等々、いずれも1人、であった。

Dさんは、こんなふうにいう。

「まったく、最近の子どもには道徳心ってものがないよね。修身もなくなったし、世の中、こんなふうじゃ、子どもだけ責めてみてもしょうがないけど、これじゃ、日本がダメになるよ。なんたって、子どもに道徳心をつけなきゃあ……、それには、やっぱり、マンガが一番だよ、マンガでそういうようなのを作ってくれりゃあ、いいんだよ」

71歳になるDさんは、しきりにアニメ番組を道徳教育の手段とすることを提唱する。

なによりも、「道徳」あるいは、「家族、親子の情愛」などをアニメを通じて子どもの心に植えつけたいと願う老人の多かったことは興味ぶかい。

これを裏返せば、老年になってみていっそう、弱い者をいたわったり助けたりすることの大切さ、秩序正しい生活を送ることの大切さを知った、とも読める。

助けを必要とするようになってはじめて、それまでは一つの観念として理解していた道徳を身をもって知った、ということであろうか。あるいは、老人であるということでも味わった種々の苦い経験にもとづくものでもあろうか。

いずれにしても、産業化が進行した結果、現在の老人が若い頃見聞した老人としての生き方もはや許されなくなっている。社会全体から老人の役割がすこしずつ減少し、老人が老人として安穩に余生を過すことがむずかしくなってきているのである。

老人世帯の比率が年々増加しており、しかも日本社会全体としては確実に高齢化の度合を深めている。老人といえども、もはや、社会から完全に引退してしまふことはできない。細々ながらもなんらかの形でかわりをもち続けなければならない。そのためには、もっとモラルの向上を、というわけで、先述のような意見が老人の間から出てくるのである。アニメ番組で道徳教育を、というのが一部の老人の切なる願いであった。

(香取淳子)

■特集 2

メディア教育の勧め

—WATCH (米国) CVS

カリキュラムから—

米国の首都ワシントンD.C.にWATCHと呼ぶ市民団体がある。WATCHは「ワシントン子どもとテレビ協議会 (Washington Association for Television and Children) の略称で、子どものテレビの領域で活動을續けて9年目になる (ガゼット№ 6参照)

WATCHの活動はさまざまだが、FCC等の連邦政府委員会へのはたらきかけに次いで重視されているのが、能動的な視聴者の育成である。スピーカースピーカーを持ち、地域で催される各種の集りにこれまで多数の講師を派遣してきたが、今度、テレビについて子どもたちに直接教え、その批判的視聴技能 (Critical Viewing Skill = CVS) を育てるためのメディア教育カリキュラムを開発。地域の小学校や幼稚園、保育園の先生たちの協力を得て、このカリキュラムを使った授業が行われ始めた。

カリキュラムはカード化されており、どれでも自由に選び出して、正規の授業の中で使えるよう工夫されている。以下にその一部を紹介する。尚、WATCHでは使ってみて感じたこと、子どもたちの反応などのフィードバックを求めている。家庭や学校、地域の集りなどでメディア教育を試み、その報告をぜひFCC事務局までお寄せ下さい。

●レッスン1

テレビの画像はどこからくるの？

学習目標 番組が制作され電波に乗って各家庭に送られてくるまでの過程を教え、テレビのメカニズムに気づかせる。

教材 テレビのメカニズムを図解するもの

活動 教材を見せながら説明する

話し合うこと

- テレビで見ている絵 (画像) はどこから送られ

てくるのか。

- テレビに出ている人はどこにいるのか (受像機の中にいるのだろうか)
- テレビで見ていることは、今、実際に起っているのだろうか？
- テレビに出てくる人は本当にいるのだろうか。実在しないのは誰か。テレビに出てくる場所についても、実際に存在するところとしないところを区別してみよう。

対象年齢 5才

●レッスン2

テレビを見ているとどんな気がする？

学習目標 テレビを見ながら感じていること、感情に気づかせ、それを客観的に整理する。

教材 いろいろな感情を表現している顔の絵。たとえば嬉しい顔、悲しい顔、恐がっている顔、怒っている顔、ふざけている顔。それに鏡。

活動 嬉しい時どんな顔になるか、子どもたちに鏡を見ながらやらせてみる。悲しい時は？怒った時は？ 各々の絵を子どもたちに見せて、どんな時の顔かを説明させる。

話し合うこと

- 子どもの人気キャラクター、たとえばバッグスバニー (日本の場合ならパーマン) をとりあげ、嬉しい時はどんな顔をしているかを、子どもたちと一緒に話し合う。悲しい時は？その他の時は？ バッグスバニーのようなアニメ・キャラクターの表情と、それを見ているあなたの表情とでは、どう違うか。似ているか。
- おもしろい番組 (たとえばバラエティ・ショー) を見ている時、あなたはどんな顔をしていると思うか。
- テレビを見ていて笑いたくなるのは、どんな時か。何がおかしくて笑うのだろうか。
- テレビを見ていて恐くなるのは、どんな時？何が恐いのか。

対象年齢 3～5才

●レッスン3

誰がテレビを作っているのでしょうか

学習目標 テレビ番組やCMの制作にたずさわる

人びとの仕事について学び、子どもの注意をテレビの仕組みへ向けさせていく。

教材 仕組みを図解したポスター(絵)

活動 各々の職種を子どもたちと一緒に覚え、その仕事の内容を説明し、話し合う。

話し合うこと

- 放送局ではたらく人たちの中で、番組の企画を立てるのは誰か。その企画がどのような手順で番組になっていくのか。
- テレビを作っている人たちの中で、テレビの画面に出てくる人は誰か。出てこない人は誰か。
- お菓子屋さんはお菓子を売っている。それと同じように、テレビ局も何かを売っている。それは何でしょう。それを買うのは誰か。
- テレビを見るのにお金はいらぬ(タダ)と言われるが、本当にそうだろうか。私たちはどのような形でお金を支払っているのか。
- テレビに出ている人の多くは地元テレビ局の人ではない。私たちの住んでいる地域の人でテレビに出てくるのは誰か。
- 私たちの地域のテレビ局はどこにあるか。

対象年齢 小学1～3年生

●レッスン4

アニメーション番組

— 暴力的なものとうてないもの —

学習目標 アニメーション番組に描かれる暴力の

「テレビと行動」邦訳・ 出版のお知らせ

一米・国立精神衛生研究所報告書一
テレビと人間の行動についての研究は最近の10年間に米国を中心に飛躍的に増大し3,000余を数えるまでになっている。この総ての研究をレビューして80年代への提言としてまとめたのが本報告書で、その邦訳版がFCTと東海大学広報学科研究室の協同作業によって

量の多さに気づかせ、子どもたちにそのことを考えさせる。

教材 モニター用紙と鉛筆

テレビ受像機

活動 子どもたちに好きなアニメ番組をあげさせ、なぜ好きか、嫌いかの話し合いをさせる。

その後で暴力を定義する。暴力とは自分以外の人に対して使われる物理的な力である。

モニター用紙を配り、子どもたちが選んだ番組を視聴させながら、その番組に出てくる暴力を記録(モニター)させる。その結果を発表し合いながら話し合う。

話し合うこと

- 暴力はたくさん出てきたか。記録をつけてみて暴力の量の多さに驚いたかどうか。暴力場面についてどう思うか。
- テレビで見た暴力を真似したことがあるか。他の子どもが真似しているのを見たことがあるかどうか。
- テレビのマンガに暴力が多いのは何故だと思いか。

対象年齢 小学1～3年生

●レッスン5

テレビを見ることについて考える

学習目標 自分のテレビ視聴習慣を客観的にとらえ直し、批判的な姿勢を養う。

話し合うこと

○なぜテレビを見るのか?(楽しみのため、情報

完成、7月20日に出版された。

<主な内容>

テレビと健康(2章)、認知力と情緒機能(3章)、暴力と攻撃性(4章)、想像力、創造性、社会的に望ましい行動(5章)、社会化と社会的現実の概念(6章)、教育とテレビについての学習(9章)、80年代への提言(10章)、他全10章A5版120頁、文献目録(英文)付

頒布価格1,500円(送料350円)

お申し込みはFCT事務局へ

を得るため、宣伝している商品について知りた
いから等)

活動 自由な時間にテレビ以外にどんなことをす
るかを書き出し、リストを作らせる。テレビを
見ることと各々の活動はどこが違っているかを
考えさせる。(たとえば、スポーツをすれば運
動になる等)

再び話し合うこと

- サッカーのためなら、テレビを見るのを止めら
れるだろうか。読書とテレビではどちらを優先
したいか。大好きなおもちゃであそぶのとテレ
ビとでは? 友だちとテレビでは?

自由課題 3日間、テレビ視聴日記をつけてみる。
つけ終わったら、その記録をよく見て、テレビを
見ていたのでやれなかったこと(活動)をリス
トアップしてみる。

対象年令 小学4～6年生

●レッスン6

テレビの登場人物—実在の人、虚構の人

学習目標 テレビに登場するヒーローと現実の世
界のヒーローを比較し、現実と虚構の違いを区
別できる力を養う。

教材 辞書

話し合うこと

- ヒーローとはどのような人のことか。ヒーロー
と呼ばれる人はどんな行為をするか。辞書を使
いながら話し合い、ヒーローの特質を書き出し
てみよう。

活動 実在の(過去及び現在の)ヒーローを子
どもたちにあげさせ、彼らは何故ヒーローと呼ば
れるのか、その理由も一緒に黒板に書き出して
いく。次にテレビのヒーローのリストをつくる。

再び話し合うこと

- テレビのヒーローと実在のヒーローの似ている
点、違っている点は何か。テレビのヒーローの
特質として、特に目立っているのはどのような
ことか。
- 英雄的行為と大胆不敵でハラハラさせられる行
為とでは、違いがあるだろうか。

自由課題 いつも見ているテレビの番組には、ど
んなヒーローが登場するかを書き出し、各々の
ヒーローの特質を分析する。

対象年令 小学4～6年生

●レッスン7

コマーシャルのターゲット(対象)

学習目標 消費者としての意識と技能を育てる

活動 私たちはコマーシャル(CM)のターゲッ
トとして、子ども、10代、大人、家族、その他の人
びどのように分類されている。このリストを子
どもたちに示し、どの商品がどのターゲットに
向けて宣伝されているかを考えさせ、商品名と
そのCMをあげていく。

話し合うこと

- 時間帯によってCMのターゲットはどう違うか。
それは何故だと思いか。
- CMは誰を対象に宣伝するか、つまりターゲッ
トが誰かによって、異なる宣伝技法を使ってい
る。ターゲットごとに、どんな技法が効果的だ
と思いか、話し合ってみよう。(「説得技法」
の項を参照のこと。アニメ技法、街頭風景、タ
レント、CMソング等の技法がある)
- もし仮に、どのCMでも同じ宣伝技法しか使え
ないとしたら、そのようなCMについてあなた
はどう反応すると思いか。商品の選択で今より
慎重になると思いかどうか。
- 消費者としてのあなたにとって、もっとも効果
的な宣伝方法はどのようなものだろうか。

対象年令 小学3～6年生

☆ ☆

WATCHがフィードバックを期待しているのは

- ①このカリキュラムが対象年令の子どもにふさわ
しいかどうか(難かしすぎる、やさしすぎる等)、
- ②使ってみて、子どもの反応はどうだったか、
- ③このようなメディア教育を小学校で行うことが
可能かどうか。もし可能なら、何の課目の授業
でどう織り込んでいけばよいか、その実践例。
幼稚園や保育園の場合はどうか。

(文責・鈴木みどり)

テレビの音と光がビタミンB₁とアセチルコリンを消耗する

岩佐京子氏—ルナ子ども相談所長

岩佐さんは著書「テレビに子守りをさせないで」で子どもにとって問題になるのはテレビの音と光である、という提起をした。以来、この問題を究め続けている。去る6月のFCTフォーラムではこの延長線上で得られた成果を詳しく発表し、保健所関係など多くの参加者から共感を博した。

以下は当日の講演要旨についてインタビューを試みたものである。

— テレビの音が問題であるとしてもはじめはその裏づけがなかったと言われましたが……

岩佐 そうです。自閉症児の治療でともかくテレビ、ラジオなどの音を消すという指導をすると、それだけでことばが出てくるなど、明らかな効果が表れるケースがありました。でもなぜかはわからなくて……

— それがどういうことから

岩佐 日大教授の田村豊幸先生の、音の刺激が耳から脳に伝達される時にビタミンB₁とアセチルコリンを消耗するという説を雑誌で見つけて、早速会いに行きました。いろいろお話してみても、面白いことをやっていますね、と励まして頂いたのですが、その時にアドバイスを頂きました。

— たとえば具体的には

岩佐 ビタミンB₁は食物からもとれるがうんと不足している場合はビタミン剤で補った方がいいといわれました。それでアリナミンA、ポボンS、御飯にまぜて炊くポリライスなど、はじから試みました。ことばが出てきた子もいましたがいずれも効果の出る例が少ないんですね。

— ビタミンB₁が欠乏するとどういった症状が出ますか

岩佐 一般的症状としてはイライラ、疲れやすい倦怠感、筋力の低下、不眠、体温の低下、皮膚感覚の鈍り、などがあります。

— ビタミンについてはかなり研究を？

岩佐 ええ、関係のありそうな本ははじから読んで、興味をひかれた著者には会って頂き、いいヒントもたくさん頂きました。

— そこで行きあつたのがアセチルコリンということでしたが……

岩佐 いくつかの神経伝達物質の中でとくにアセチルコリンが音刺激で消耗される。その原料であるレシチンを補ったらいいのではないかというアドバイスを三石巖先生から頂きました。

— レシチンというのは

岩佐 大豆油から抽出した栄養補助食品です。

— 効果はどうですか

岩佐 ともかく食べて数分で不気嫌がおさまる。一週間くらいで多動がおさまる、などかなりの効果があがっているので、いまはレシチンの量や与え方を模索しているところです。

— ビタミンB₁が不足するから自閉症になるのか自閉症だから欠乏するのか、因果関係はどうなのでしょう

岩佐 音や光、食べすぎなどの過剰刺激がビタミンB₁とアセチルコリンの不足を招き、自閉症になるのではないかと思います。思春期の登校拒否や家庭内暴力、校内暴力なども、意欲の減退や抑制力の不足からくるんじゃないかと思いますが、これもテレビやラジカセの音刺激と無関係ではないでしょう。

— そうすると、外国に比べてはるかに騒音の中で暮している日本人は意識的にビタミンB₁とレシチンを多めに取るように心がけた方がいい？

岩佐 そう言えるかもしれません。

— この研究はまだ先が長そうですね。また新たな成果を得られた時にはFCT会員として発表フォーラムをお願いします。ありがとうございました。（インタビュー 構成 竹内希衣子）

テレビと家族

家族の形態が最近、大幅に変化しているといわれる。離婚件数はウナギ上りにふえ、老人だけの世帯も増加している。このような現実の家族、すなわち「テレビの前の家族」の変化にともない、「テレビの中の家族」は変化したのだろうか。したとすれば、どう変化したのだろうか。

FCT第3回テレビ診断(テーマはテレビと家族)に向けて、「子ども番組の制作者に聞く」と題し、5月フォーラムを開催した。子ども番組の制作者に、その制作意図、視聴者観、家族観をたずね、テレビ診断への手がかりを得ることを目的としている。

柳井満氏(TBS)、宮村妙子氏(国際映画社)をむかえ、鈴木みどり(FCT)の司会ですすめられた。

まず、ドラマ制作の経験豊富な柳井氏は、テレビに描かれる家族は、当然、現実の家族の姿を反映しないわけにいかない、と発言。

ホームドラマならなんでもうけた時期もあったが、最近はそのではなくなった。むしろ、崩壊寸前の家族、問題をかかえこんだ家族を扱う方が受けるといふ。そのせいか、今度、柳井氏の手がけた作品「オサラバ坂に陽が昇る」は、既成の家族概念から大幅にはみだしたものだ。

非行少年の矯正施設を舞台に、学校からも家族からも見放された少年たちが、寮父と寮母のもとで団体生活を送りながら、人間を知り、愛を知り、巣立っていくという設定。

この一風変わった疑似家族の設定も、結局は、校内暴力、非行の多発している現代社会を反映しているのである。

それでは、アニメ番組についてはどうだろうか。

宮村氏は、現在のアニメには家族の存在が希薄だと発言。制作にかかわっている新番組「ななこSOS」も、主人公には家族がいない。ストーリーをおもしろくするために家族を用いるということはあるが、ほとんどが家族を中心にとらえようとはしていないことを指摘。

FCTフォーラム記録

子ども番組の

報告者 柳井 満(TBS)

それには、脚本家をはじめとする制作スタッフが全員20代であることも関係しているかもしれない。アニメ制作の現場では若者が主流のせいか、家族の存在をそれほど重視していないのである。

番組のおもしろさ

制作意図と、実際に番組がどう見られるのかについては多少のズレがある、と柳井氏。作品にリアリティをもたせるために挿入したシーン、たとえば校内暴力などのシーンを見て、止めてほしいというような、制作意図を理解していない反応がある。

とはいえ、制作者としては、そういうシーンを全く排除してしまおうというわけにはいかない。キレゴトだけでは現実を描いたドラマは作れないからである。事実をもとに、何が問題なのかを提起する姿勢を崩したくない、とも。

Aさん(フォーラムに参加していた中学生)は、「シンナー遊びって、ああやるの、スゴイね、なんて、思っちゃう。だけど、テレビからの影響って、子どもの年齢によるのではないかしら」と発言。

Bさん(大学生)は、「番組の中で暴力行為などの反社会的なシーンを入れるのは仕方ないとしても、それではなぜ、子どものした悪いことに、番組の中で罰を与えないのか」と。

宮村氏は、アニメの場合、おもしろければいいというのが大前提だという。とはいえ、その「おもしろさ」も年代により変遷しているのが実のところ。ディズニーから手塚治虫、そして現在へ、という歴史がみられ、今の若い人の中には、ディズニーのあのフルアニメーションを気持悪いという人もいるようだ。

Cさん(絵本制作者)は、「子どもたちがどういふものを望んでいるか、調査しているのか」と

1983・5・14 於：東京・市ヶ谷

制作者に聞く

S) 宮村妙子(国際映画社)

質問。

宮村氏は、アニメの対象者は小・中学生が中心だということはわかっているが、格別な調査はしていない。子どもにこういうものを見てもらおうという姿勢で番組を制作しているという。

Dさん(地方公務員)は、「アニメの場合、制作費が高いので、キャラクター商品との関係で企画されるのではないかと具体的な数字をあげて質問。Dさんによれば、ガンダム、マクロスなどアニメの中でもメカものは、玩具会社がスポンサーになっていることが多く、制作者は玩具会社と妥協せざるをえない、という。番組のおもしろさは結局、キャラクター商品の販売に直結しているというわけである。

ドラマについても、テレビ特有の状況がある、と柳井氏は指摘。すなわち、テレビの視聴者は女性の方が男性よりはるかに多いこと、悲しみをあらわすにしても男性ライターなら照れ故に控えめに表現するところを女性ライターはその2倍以上に表現すること、女性ライターの方が女の世界を描きやすいこと、女の世界を描く方が視聴率をとりやすいこと、テレビでは先走った内容のものは理解されにくいこと、などの点から、テレビのシナリオライターには女性の方が適している、というのである。

テレビ番組のおもしろさを規定している諸々の条件を考慮に入れておく必要があるようだ。

テレビの見方

Eさん(研究者)は、「テレビを見終えて、その内容について話しあうことは少ないのではないかと発言。

感動的なドラマを見、さめざめと涙を流した後でも平気でCMを見、ニュースを見てしまうという、テレビ視聴者の受動性について指摘。

それに対し、柳井氏は、テレビ制作の条件として、まず、見てわかってもらわないといけないということがある。したがって、何も考えなくても一日中見ていられるという特性があり、これが、テレビの一番悪い点だという。

視聴者の方で積極的に“考える”時間を作り出すことが必要。番組を一本見たら、そのままドラマと見続けなくて15分ぐらいは消す、という作業が必要だというのである。

また暴力シーンの多い、子どもに悪い影響を与えそうな番組については、できるだけ親子が一緒になってテレビを見、どこがよくてどこが悪いのかを話しあうのがいい。

“悪い”番組の中に、子どもに善悪を教える生きた材料を見い出し、子どもの社会化に役だてていくことが大切だというのである。

“悪い”番組をその表層だけ見て批判することは決して、いい番組づくりへの一歩とはならない。番組全体を通じて送っているメッセージの方をくみとった上で、番組批評をする方がいっそう建設的であろう。

テレビがすでに生活環境の中に根をおろしてしまっている現在、テレビの中で何が描かれているのか、テレビの前でそれがどのように受けとられているのか、を究明していくことは、何にもまして重要なことであろう。

FCT第3回テレビ診断では、「家族」に焦点をあて、主に、「テレビの中の家族」についての分析を、現在、進行中である。分析結果はいずれ報告書にまとめ、発行の予定。できるだけ多くの方にお読みいただき、テレビを考える際の一助としていただきたいと思います。(文責・香取淳子)

FCT 4月フォーラム(1983・4・9)報告
テレビの“いじめ”の受けとめられ方

- 名取弘文 (小学校教諭)
- 村瀬寿人 (中学校教諭)
- 加藤千秋 (共同通信記者)

中国で出会った子どもたち そして、テレビ

3月末の北京はまだ寒く、人びとは黒や紺の人民服に身を包んでいた。このモノクロの世界で子どもたちは赤やピンク、ブルーと色とりどりの服装をして華やいてみえた。中には同色の小さなチーフを首にまき、髪にリボンを飾っている女の子もいる。子どもたちの表情はどの子も驚くほど明るい。人口の増加抑制を至上命令とする中国では、今、一人っ子政策の推進であらゆる努力が払われている。一人しか持たない、持てないということであれば、子どもは正に宝物と同じ。可愛いさもひとしおということか。日本でよく見かける風景のように、子育てに疲れきった母親にしっかりとばされている子どもの姿など、探しても見つかるはずもない。日曜日の朝、天安門広場を散歩する子どもたちは若い父親と手をつなぎ、あるいは、祖母の押す乳母車の中にゆったりと身を置いて、まぶしい笑顔をふりまいている。

一人っ子だからといって、母親と子どもが変に密着していないのもいい。女性も仕事を持ってはたらくのが当り前の社会では、父親も祖父母も子育てでそれぞれ果すべき役割がある。いや、家庭の中だけでなく、親たちの職場や地域にあるさまざまな保育園が、子どもの養育の大きな部分を引き受けているし、大都市には、たとえば今度の旅で訪れた上海には、大型の学童保育施設ともいえる「少年宮」がいくつかあって、そこで小学生は放課後のひとときを過す。しかも、少年宮は単なるあそび場を提供するだけでなく、子どもの興味にこたえてあらゆる種類の教室を開設している。ピアノ、ヴァイオリン、各種の民族楽器、バレエなどの練習は、いってみれば、日本の月謝の高い「おけいこ」に相当するものだが、もちろん、参加費は無料。この他にも習字、織物、版画、上級生用には理科実験の教室もある。入室登録では、才能の有無が問題になるようなものについては簡単な試験をすると聞いたが、それにしても、次代

を担う子どもたちは地域で、そして、国で育てるという思想が、こうした施設を支えていることは明白である。

この考え方は、テレビの場合にも同じようにある。北京の中央テレビ局を訪れ、子ども番組の二人の制作者と話をする時間を持ったが、彼らが強調したのは子どもたちへの教育的配慮ということで、それは、政府の一人っ子政策の一環として捉えられていた。ラジオ・テレビ部は國務院（中央政府）の中の重要な省の一つである。テレビがそのように位置づいている国では、政府の政策を具体化する教育メディアとして機能して、当然。

しかし、教育といっても、固苦しい番組ばかりが並んでいるわけではない。語り合った制作者の一人は女性で、彼女は自分も母親であると前置きし、「子どもは楽しみながら学ぶのが普通です」と言う。そして、兄弟や姉妹がいれば自然に学習できる感情の発達や情緒に関する問題を、クイズ形式で学べる番組を制作している、と教えてくれた。日本製の「鉄腕アトム」や「ニルスのふしぎな旅」を放映しているのも、娯楽の中での学習という目標に合致しているからということらしい。ちなみに、この両番組は中国の子どもの間でも大変な人気である。

子どものテレビ好きはどの国でも同じこと。テレビに夢中の子どもたちの様子を会う人ごとに聞かされた。一人っ子だからか、親の方もつい甘くなって、テレビの前から子どもを引き離すのに苦労しているようだ。といっても、中国のテレビは普通夕方5時頃から、夜は遅くても11時で終了である。その中で子ども番組といえば、北京の場合、週3日、1日30分でしかない。だから制作者側としては、日曜日に特別番組を企画するなどの配慮をして、もう少し、子どものテレビの時間を長くしたいという意向がある。子どもが大人向けの番組を見るのは望ましいことではないから。

テレビを買うのに白黒で一人当りの平均年収分ぐらいかかる。それでも、急ピッチで普及し始めているのが今日の中国である。（鈴木みどり）

ケース・スタディ

横浜市T幼稚園(私立)の場合

一視聴日記をつけてみた母親の感想一

Aさん……今日はあまりテレビを見ませんでした。

ふつうはもう少し見えています。主人が家にいる時は主人がチャンネル権優先ですので、子ども達もそれに関してもんくはいいません。

Bさん……見ても見なくてもほとんどテレビがついていて子ども達の為には良くないと思った。

Cさん……私の家では、私本人がTVを見ず、音楽が好きなので、ラジオ、カセット、レコードが多く、子どもも決められている時間以外にテレビをつけようとしませんので、意外にテレビの時間が短い方と気がつきました。

Dさん……天気の良い日だったので、ずっと外で遊んでいたからあまり見なかった。帰宅してからは、たいてい兄妹で遊んでいる。特に絵をかいたり、工作をしているので、心配するほどテレビづけになっていないと思う。

Eさん……母親は、とくに見たいと思っていなくても、子どもと一緒にまんがを見たり、夫と一緒にスポーツニュースを見て、一番長い間テレビを見ている。

Fさん……いつも何げなく子どもに見せていたがこのようにしてみると意外と時間が長い。もう少し番組を選んで見せたいと思う。

Gさん……夕～夜の視聴時間はともかく、朝のテレビにかじりつく時間が長すぎる。母親は家事に忙しく、子どもをついでテレビまかせにしてしまっていた。

Hさん……子どもにとって、どういう番組がいいか話し合ってきたりやるべきだと思いました。

Iさん……テレビ番組は親の選たくで、子どもに見せたくないものを排除することができるが、CMは時と場所を選ばず目にふれることが多いので内容を吟味してほしい。

(文責・松山恭子)

家族	月日	見た番組と見た人
Aさん (5人)	5/22 (日)	パーマン 30分(母,子1,子2) 野球 2時間(父) 洋画 2時間(父)
Bさん (4人)	5/23 (月)	ニュース 30分(母) 母をたずねて三千里(母,子2) おしん 15分(母,子1,子2) NHK教育 3時間(子2) わらっていいとも 1時間(母,子2) ごちそうさま 2時間半(母) まんが 2時間(子1,子2) ドラマ 2時間(父,母)
Cさん (3人)	5/23 (月)	天気・ニュース 30分(父) 忍者ハットリくん 30分(母,子) パーマン 15分(子) まんが・ボンキッキ 30分(子)
Dさん (4人)	5/23 (月)	ルパン三世 30分(子1,子2) ウルトラアイ 30分(父,母) NHK特集 30分(父,母)
Eさん (4人)	5/23 (月)	テレポット・レーダー 45分(母) パーマン 15分(母,子1,子2) ハットリくん 30分(母,子1,子2) ザ・かぼちゃワイン 30分(母,子1,子2) プロ野球, ニュース(父,母)
Fさん (4人)	5/23 (月)	ひらけボンキッキ 30分(子2) サンデーベル 30分(子2) コンボラーV 30分(子2) イブニング 25分(子2) ハットリくん 30分(子1,子2) ザ・かぼちゃワイン 30分(子1,子2)
Gさん (4人)	5/23 (月)	母をたずねて三千里(子1,子2) ひらけボンキッキ 30分(子1,子2) コンボラーV 30分(子1,子2) パーマン 15分(子1,子2) フクちゃん 30分(子1,子2) なるほど・ザ・ワールド(父,母)
Hさん (4人)	5/22 (日)	ニュース 30分(父,母) バッテンロボ丸 30分(子1,子2) アルプス物語 30分(子1,子2) ドラマ・人間模様(母)
Iさん (4人)	5/23 (月)	朝のホットライン 30分(父,母) イブニング・レーダー 45分(父,母) パーマン 15分(子1,子2) ハットリくん 30分(子1) あんみつ姫 30分(父,母,子1) 新車情報'83 50分(父) 夜のヒットスタジオ 50分(父,母)

海外 ニュースフラッシュ

●ACT賞の発表と創設15周年記念集会 Boston, U.S.A.

米国ACTでは毎年、子どものテレビをより良いものにしていくのに貢献したテレビ局や制作者を称え、その功績に対してACT賞を授与してきた。今年は創設15周年を記念する集会を6月にボストンで持ち、その席上でACT賞を発表。その受賞者は以下の通り。

特別賞—ジョン&メアリーR・マール財団(セサミストリートや各種のケーブル番組での創造的試み、またACT等への長期にわたる財政的援助に対して)、全国キャプション研究所(難聴児への奉仕に対して)、PBS(全国の子どもに良質の子ども番組を提供し続けてきたことへ) ACT賞:商業テレビ—サンフランシスコKGO-TV局(機知に富んだ子どもの眼で世界を見るDUDLEY'S DINEY)マルチメディア・プログラム・プロダクション(YOUNG PEOPLE'S SPECIALS)、サンボウ・プロダクション(優れたアニメ手法と音楽で構成するTHE GREAT SPACE COASTER)、ボストンのWBZ-TV局(いろいろな活動をする子どもを紹介するSUPER-KIDS)、公共放送—ファミリー・コミュニケーションズ(優れた幼児番組MISTER ROGERS' NEIGHBORHOOD)、カナダのTV Ontario(週一回の楽しい音楽教育THE MUSIC BOX)、教育テレビ・エージェンシー(10代向けの消費者教育ドラマGIVE AND TAKE)

この他ケーブルTV関係で4件と健康キャンペーン用のテレビとラジオのスポット(PSA)7件。PSAの受賞は今年が初めてである。

●インドの開発コミュニケーション全国委員会(National Council of Developmental Communication=NCDC)

国家の開発にコミュニケーション・メディアはどうかかわるべきか。この古くて新しいテーマに市民サイドから取り組んでいるのがNCDC。研究者を中心に個人及び法人の会員を持ち、事務局をKarnal市に置く。活動内容は開発とコミュニケーションに関する調査、研究、実施計画の立案と援助、メディア利用のための研修会、情報サービスなど。

今年から研究誌INTERACTIONを発行し始めた(年3回)。連絡先・NCDC, P.O. BOX 33, Karnal-132001, India。

●ケーブルTVで女性による女性のための番組制作と放映が増加—Ms. 1983年4月号より

米国ではケーブルTV局の開設に地方自治体の許可が必要で、その際地域住民の要望を反映するための活発なはたらきかけが行われるのが普通。その結果、地域の住民が自由に使えるアクセス・チャンネルが各地に生まれている(スタジオも自由に使える)。

このアクセス・チャンネルを「もう一つのテレビ」として活動をしているのがフェミニスト女性たち。既存のテレビに描かれる固定的な女性像に対抗する新しい女性像を、自分たちの手で番組化し、放映しようというわけである。ビデオ制作技術の習得は、たとえばユナイテッド・アーティスト・コロニアが提供するワークショップ(8週間、実費以外は無料)で。これに参加したNOW(全米女性機構)の会員は夫の暴力からのがれて集まっている妻たちの施設(シェルター)取材し、その作品をNOWの全国網を通して各地に配布している。

女性専用のチャンネルを持つケーブルTVもある。ダラス市の場合、このチャンネルで地域の女性による番組だけでなく、衛星を使ったケーブル・ネットワークの番組も放映している。またニュージャージー州最大

の独立ケーブルTV局の番組A Woman's Placeは司会者兼プロデューサー(女性)の給料を地域のYWCAが出し、ケーブル局は技術面で協力という形で実現したもの。そのため同性愛、妊娠中絶、女性の権利、女性共同体、ケーブルTVにおける女性の役割と、フェミニスト女性の関心事を次々と取り上げ注目を集めている。同番組は1月から全国ネットされている。

●ローカルラジオで子どもたち制作のニュース番組を毎日放送—米国

米・ルイジアナ州コロニアにあるKCTO-AMラジオ局では、地域の小学校の発案で、同小の4~6年の子どもたちが作る5分間のニュース番組を毎日放送している。このユニークな番組が実現したのは、州教育局の援助で学校にAP通信の受信機を設置できるようになったため。

子どもたちは毎朝早く登校してはAP通信から送られてきているニュースを読み、そこから選択したものを休み時間を使って放送用に書き直し、テープに録音する。作業は順番に、誰もがこの楽しい仕事に参加できるようにしている。

同小学校は低所得層が中心の貧しい地域にあり、図書館すらない状態のため、このニュース番組制作が子どもたちにとっては、あらゆる面で良い刺激となっている。自分たちの作ったニュース番組と新聞の紙面を比較したり、新聞の切り抜きを始めると、それが社会や国語、算数の授業でさえ役立ってくる。

ニュースは初めの頃昼間に流されていたが、子どもたちが自分の家で聞きたいと希望して午後4時に変更。家族にとってもラジオの再発見になっており、局側でも大歓迎とか。

●第4回CBI賞—カナダ

子ども放送研究所(CBI)は2年毎に国内の優れた子ども番組を選びCBI賞を授与。次号で作品紹介。

FCT データバンク

— 海外篇 —

●TVステレオタイプとたたかうためのACTハンドブック Fighting TV Stereotypes: An ACT Handbook 1983

テレビを通して子どもは自分と異なる様々な人たちのことを知る。しかし、テレビが描く女性や少数民族のイメージはきわめてステレオタイプで、子どもへの影響が心配される。ACTでは、テレビから性差別や人種差別を排除し、このメディアをより望ましい方向へ変えていくためのハンドブック(手引書)を作成。

全24ページ。左ページに写真、右ページは次のようなテーマ別に、具体例やデータを紹介して、コンパクトにまとめている。—テレビのステレオタイプが何故問題なのか、研究データは語る、このような描き方のどこが悪いのか、広告はどうか、テレビを動かしている人たちに女性や少数民族が少ない、PBS(公共テレビ局)の優れた番組、商業局にもあるポジティブな番組、ケーブルTVの可能性、雇用平等法のこと、テレビ・システムを変える。

最終ページのアクションガイドはテレビ業界、広告企業、視聴者(親)の3者にそれぞれできる行動を示している。その一部を紹介すると—
〈テレビ業界にできること〉

あらゆるジャンルの番組を多様化する、少数民族と女性の雇用促進、地域の市民グループのアクセスを歓迎し、ケーブルTVやローカル局に少数民族の声を反映する等。

〈広告企業にできること〉

女性や少数民族の関心事を反映する番組に資金援助、商業局以外の選択肢としてPBSを支持する。新しい視聴者層の育成や地域住民の参加を促進する計画に資金援助する、障

害者や女性、少数民族がテレビ局の運営に参加できるように教育・訓練計画のための資源をプールする等。
〈私たち視聴者にできること〉

子どもと一緒にテレビを見て、テレビが描く役割モデル、その固定的イメージについて話し合う、子どもの反応をテレビ局、制作者、広告主に伝える、ケーブルTVの開設で意見を述べ、子どもや女性、少数民族のニーズにこたえるような運営になるようにはたらきかける等。

●障害を持つ人びとについてのコミュニケーションの促進 Improving Communications about People with Disabilities, United Nations, 1983.

国際障害者年に提起された目標の達成で情報メディアにできる役割とは何か。このことを討議するため昨夏ウィーンで開かれた国連セミナーでは8項目からなる勧告を採択した。この勧告を視覚化したのが本パンフレット(18頁)。新聞、書籍、雑誌、ラジオ、テレビ、映画、演劇、マンガ等のメディアが障害者をどう描いているか、その具体例を肯定的と否定的の両面で世界各国から集め、次の勧告文と共に写真によって示す。

①障害を持つ人びとを家庭や学校、レジャー、その他のさまざまな状況の中で、当り前の風景として描くこと、②障害を持つ人と持たない人が一緒になる場合、知らないことへの好奇心がわいてきたり、どうしていいかわからなくて困ったりすることがある。メディアはこのことに留意して、機会をとらえ、どうすればよいかを例示するのが望ましい。③障害を持つ人びとを中心にすえる作品ばかりでなく、彼らが一般の人びとの一部として加えられているような作品も必要、④障害を持つ人びとを従属的な、あるいはかわいそうな人として提示しない。注意して避けるべき他のステレオタイプとしては、障害者を生れつきの聖者として、あるいは性不能、理由なく危険な者と

して描くこと。また、障害があるので特別な能力を持つという描き方もしない。⑤障害を持つ人について述べる際は使用する言葉に注意する、⑥障害者も他の人たちと同じように多面的に描くこと、⑦障害を持つ人の業績や困難さをメディアの中で提示する時は、障害について必要以上に強調したり、情緒的にならないこと、たとえば、ニュースやドキュメンタリーで登場する人が障害を持つ場合、その事実への不必要な言及は避ける、⑧心身の障害につながるような損傷の防止と治療について、メディアは広く情報を提供すること。また、障害者とその家族が利用できる情報も提供すること。

●ケニアのコミュニティ・ラジオ Community radio for Kenya, The UNESCO Courier, 1983年3月号

ケニアの首都ナイロビから450 Km離れたヴィクトリア湖岸にある町ホマベイで1982年5月、原地語を使用する小さなコミュニティ・ラジオ局がスタートした。ローカルニュースや保健・家族計画の情報を主体に毎日一時間放送する。局員は国立のボイス・オブ・ケニア(VOK)から派遣されたプロデューサー1名に原地住民のアシスタント3名。ニュースは市場や農場、学校、地域の住民組織から集められる。

これはユネスコ・プロジェクトとして計画されたもので、アフリカ諸国で実情に即した低コストの放送を可能にしていくための実験である。アフリカではテレビよりラジオが重要だが、そのラジオでさえ大都市周辺の住民にしか利用されていない(普及率7%)。中央の全国ネットワーク・ラジオの出力を増大し、地方の利用に供する必要が高まっているが、そうすることは必ずしも望ましい方向ではない。地域格差の著しいアフリカでは各々の地方のニーズに即した情報が必要で、また、全国共通語が使われている国は少なく、国によ

っては60以上の言語と方言を使用する人びとを抱えている。

ホマベイ・コミュニティ・ラジオの実験では太陽電池とセットにされたVHF/FM送信機とオーディオ・ミキサーを使用し、順調である。

●教会女性とマスメディア、The Study of Women in the mass Media and Church, Lutheran Office of Communication, Tokyo, 1983. 3.

日本のキリスト者女性はどのようなメディアに接触しているのか。また、そのことと女性としての意識や行動はどう関連しているのか。調査は昨年1月ルーテル教会に所属する20才以上の女性を対象に質問紙記入法で実施し、999人から得た回答を分析した。

調査結果から、まずメディア接触についてみると、テレビはNHK、新聞は朝日というのがキリスト者女性の特徴。NHKを好む理由としては教養番組やドキュメンタリーなどよく見る番組がNHKに多いため、特にNHKを信頼しているからというわけではない。民放はCMがあるから見ないという人もかなりいる。

女性意識としては結婚観、離婚に対する考え方など一般女性とさほど変わらない。しかし、社会活動をしている人は24.6%と高い比率となっている(教会活動を除く)。

●日本における子どもの読書習慣とテレビの影響 The Reading Habit of Children of Japan and the Impact of Television, Nissanka S. Madurapperuma, National Book Development Council, Colombo, Sri Lanka, 1983

マデュラベルマ氏はスリランカの少壮の研究者で、同国で開局して間もないテレビのあり方を展望するため、テレビ先進国の日本の実態研究のため来日。その研究成果をまとめたのが本報告書(全135頁に調査表等の資料篇がつく)。日本におけるテレビの影響を子どもの読書習慣との

関連で追求しており、第三世界の眼で捉えた実態の英文報告として貴重。

内容は目次から序文、書籍とマスメディア、書籍の果す役割と機能、日本における出版事情とマスメディアの発達、日本での書籍の普及と読書奨励のための活動、日本の教育制度と読書との関連、テレビの功罪、子どもの読書習慣とテレビ視聴についての意識調査の結果分析(子ども、教師、母親の3者対象に質問紙調査3種を実施)、読書とテレビ視聴一調査結果の考察、各界の個人訪問から得た意見、関連の諸データ、要約と結論、資料篇。

マ氏による調査は昨年11月東京の他、大阪、静岡、熊本、北海道の小学校8校、中学校11校で実施された。その結果は全般的にいて、読書に与えるテレビの影響の大きさを実証するものとなっている。テレビは有効な学習メディアとして使い得ると語る人は多いが、実態としてみると、教師も母親もテレビの肯定的な機能を引き出す上で、何ら積極的な役割を果たしていない。これがマ氏の結論である。表現の自由がメディア側だけのものとして捉えられ、真の意味での人びとの表現の自由は過剰な商業主義の前で危うくなっているとの鋭い指摘もされている。

●メディア教育の新しいアプローチ フランスの場合 New Approaches to Media Education, Communication Research Trends Vol. 3(1982) No. 2.

フランスでもCVS(批判的視聴技能)教育の導入が始まっている。しかし教師を対象とする調査では、CVS教育の必要性を感じている者は少ない。ニュースやドキュメンタリー等の情報源としてテレビを考えている教師が多く、いわゆる娯楽番組の視聴に関しては、学校教育の関与しない領域という位置づけである。

フランスの子どもや親にとってテレビとは何かを検討する本「テレビの前の子ども」(L'enfant devant la

television, 1981)では次のよう諸点でのメディア教育を説いている。まずテレビを子どもと親と教師の人間的な交流の場として捉えることが必要。次に、最初からメディアについて理論的に教えるのではなく、子どもの日常経験としてのテレビから始めること。また、教室での話し合いでは、番組内容の理解だけでなく、見ている時に感じること、視聴経験にも目を向けていくこと。

子どもにビデオ作品を作らせる制作活動は、CVS教育の観点から、必ずしも望ましいとはいえない。子どもは多くの場合、テレビで見たものを表面的に真似るだけだから。テレビ・メディアという視聴覚言語の理解が前提として必要で、子どもはこの言語を使って自分自身の考えを表現し、他の作品も批評できるよう指導されなければならない。

●日本の消費者 1983 Consumer Currents in Japan, the Information Center for Public Citizens, Tokyo 1983. 4

埼玉県嵐山で開催された国際消費者機構(IOCUC)国際セミナー(83年4月)のために作制された資料。消費者問題と取り組む大小さまざまな市民団体が、日常活動の中で蓄積してきたデータに基づいて、日本の消費者が置かれている今日の状況、問題点を各領域で示している。消費者サイドからの英文資料が少なく、コミュニケーション・ギャップが大きかっただけに貴重。

冒頭で消費者問題で長い活動経験を持つ野村かつ子氏が今日の日本における消費者の動きと問題点を整理し、日本の経験を世界の消費者、特に第三世界の人びとと共有し、消費者の健康・安全をどう守るかを市民レベルで語り合っていくことが必要と説く。問い合わせ先:東京都中央区京橋1-1-5セントラルビル9階、市民情報センター。

(文責・鈴木みどり)

FCT データバンク

— 国内篇 —

●子どもの中のテレビ、小島明、広畑一雄、清水正三郎共著、国土社、83年4月。

テレビ放送が開始されて30年余、テレビは今や、空気のような存在となってしまった。生まれた時からテレビがあり、テレビとともに育ってきた世代が日本の全人口の大半を占めるようになるのも、もはや、間近か。今ほどテレビは人間にとって一体何なのか、という根源的な問いかけが必要な時はなく、その存在意義や功罪を考え直さなければならなくなっている時はない。

このような問題意識のもとに、本書は編集されている。

テレビに育てられた子ども、テレビのとりこになった子ども、テレビで学習する子ども、子どもにとってテレビは何であったか、両刃の剣その名はテレビ、などの5章から成っており、子どもの生活環境としてのテレビが多面的に把握できるよう試みられている。

全般に、実証研究をベースに論述されており、テレビに密着した子どもの生活が浮き彫りにされている。

4章の4節では、とくに、「日米のお母さんたち遂にたち上がる」と題し、ACTやFCTの運動に触れ、子どもの生活環境を守ろうとする視聴者たちの運動プロセスを紹介している。

テレビはすでに空気のような存在になってしまっている故に、その内容に対し、絶えずチェックの目を光らせておく必要がある。大気保全運動のテレビ版が必要ということであろう。

テレビをいかにうまくコントロールし、子どもの健全な成長や福祉向上に役立てていくかが重要、と結論。

●人びとは、テレビをどう見ているか、吉田潤、『文研月報』、83年3月号、PP. 1-10。

テレビ30年調査からの結果報告。低学歴、高齢層は視聴時間量が長く、高学歴、若年層は視聴時間量が短い。テレビ内容について、良くなったとする者は、高年層、低学歴の人に多く、悪くなったとする者は、30代の女性、高学歴層に多い。

また、ニューメディアに対しては、ニュースや情報のリクエスト、サービスがもっとも多く、53%、次に、専門局化への希望が多く、41%。

このような結果は、ニューメディアへの期待であるばかりでなく、今のテレビ内容に対する不満が投影されたものとして理解することができる。最新の情報、本当に役立つ情報、学習意欲を十分に満たしてくれるような番組への渴望が、この調査結果に示されている。最近の視聴者像を知るための好資料。

●学校放送はどう利用されているか、宇佐美昇三、『放送研究と調査』、83年4月号、PP. 42-63。

全国の幼稚園・保育所・小学校の75%から96%がテレビ学校放送を利用。中学・高校の利用率は60%前後で、いずれもここ3年ほど、ほぼ一定だと報告されている。

全体の傾向としては、小学校のテレビ利用は96.3%にも及び、昨年度より増加。その内容をみると、社会、理科、道徳などの教科の利用率が高く、50~80%もの学校で利用されている。また、最近、そういう教科のワクを超えた総合学習番組が作られ、利用率も10%と、新番組としてはまずまずのスタートを切ったと報告されている。

中学では理科がよく利用されており、英語については、「週3時間」のカリキュラムのせい、利用率は一桁。この他、教師の放送観、放送教育に関する情報等についても収録。

●基本的人権と報道の自由、奥平康弘、『新聞研究』、83年3月号、PP. 64-72。

ここ1、2年、「報道と人権」をめぐって深刻な動きがみられることから、ジャーナリズムと国民との間に憂慮すべき新しい状況が生じているのではないかと問題提起。報道機関に対する信頼度が徐々に失われ、それが深刻になっているのではないかと。すなわち、報道機関は人権を擁護するというより、むしろ、人権を侵害する機関になっているのではないかという見方が国民の間で浸透しているというのである。

それは、名誉棄損やプライバシー侵害があったと認められ、勝訴したとしても、そういうレベルの法的救済は本当の救済にはならないこと、あるいは、そのような法的要件は備えてはいないが書かれる側としては不愉快であるということ、などが現実には多々あり、不利益な立場におかれた人のうち圧倒的多数は法的救済を求めて訴えようとはしない現実がある。

そのことは果してジャーナリズムにとって、いいことなのかと筆者は疑問を提示。

現政治体制のもとに、ジャーナリズムが国民の信頼に応える形で機能していなければ民主主義は成り立たないことを考えると、昨今の風潮は確かに憂慮すべき事態。

情報をめぐる環境が悪化し、破壊されつつあるという状況があるとすれば、早急に軌道修正をはかる必要がある、とする。

アメリカのサンディス事件を例に引きながら、二段階の表現の自由論を紹介するとともに、判定基準をめぐる危険性についても言及。

人間の外形的な侵害行為に対応して作られた近代法の体系からは、名誉棄損やプライバシー侵害などはみ出すような部分があるのではないかと。人権侵害においては、法的救済は所詮ファサードではないかと指摘。

●情報化時代と法、堀部政男、日本放送出版協会、83年4月。

情報化社会といわれる現代社会に生きていれば、物の生産、分配、消費に加え、無形の情報の収集、伝達、享受等を無視することはできない。とくに、伝統的な情報メディアだけでなく、新しいメディア、コンピューターが豊富な情報を供給するようになったことを視角に入れておかなければならない。

本書は、生活情報、情報公開、プライバシー、マス・メディア、コンピューターの5領域について、法との関連を考えていくためのテレビ市民大学講座テキスト。

とりわけ、商法とコンピューター、著作権法とソフトウェアなど、急速な勢いで普及しているコンピューター絡みの法は知っておく必要があるかもしれない。

コンピュータ学会が76年に設立され、法とコンピュータに関する各種の問題が論議されているとのこと。

●ビートたけしの言いたい放題、広告批評、83年3月号、PP.6-19。

ビートたけしの洞察鋭いテレビラジオ論。

テレビを見たきゃ、聴取料を払う。有線テレビのようなやり方をしていくのが、案外当たり前なのかもしれない。いまのままだと、スポンサーにしか気を使ってないからね。見てるお客というのは、実際関係ない。スポンサーさえ喜ばばいいんだから。内容より、見せちゃうためのだましの段取りばっかりに気を使うようになるんだよね。

テレビの場合、あくまで笑いはくだらないのが好きなんだよね。人が俗に、くだらねえ、あんなことよくやれるな、というようなやつ。ただ、ラジオはちょっと違う。(略)ラジオというのは、やっぱり状況設定を長く説明できるんだよね。一つの話をするのに、5、6分かかれる。一言いうたびに、その周りの心

理描写とか、その頃の境遇とかをバーッと入れていけるから、広がるんですね、イメージが。ところが、テレビだと心理描写みたいなことがあまりできない、見た目のバカバカしいのが、いいわけ。

●校内暴力の原因はテレビだ、堤有未、創英社、82年8月。

昨今の校内暴力、道徳教育の欠如に業を煮やした旧世代の母親が、自身の心情を吐露したもの。感情が先行しすぎていけるせい客観性に乏しく、説得力に欠けるきらいがある。

●優生保護法「改正」の問題点、青木やよひ、We、83年5月、PP18-21。

優生保護法改正の動きに対し、その背景、仮りに「改正」案が通るとどうなるか、「改正」案の意味するものは何か、などについて、鋭い指摘がなされている。生命の尊重のためといいながら、結局は、性行為と性殖行為の一致を女性にだけ課していくこうとする性差別的意識がその背後にあることを、見逃していない。

●仕事と職業、奥田暁子、We、83年6月号、PP4-7。

イヴァン・イリイチの「仕事観」を例にひきながら、生活の資を得るためでもない、日常生活を支えるためでもない第三の仕事、イリイチのいう「ヴァナキュラー」な仕事の大切さを説く。

歯止めなく肥大しつづける産業化社会に悼さすものはこの「ヴァナキュラー」な仕事を通じてしかないともいえそうだ。炯眼光る好エッセー。

●テレビと子どもの文化をかんがえる、永田順子、子どもと読書、83年6月号、PP4-7。

キャラクター商品をはじめ子どもをとりまくテレビ文化を、FCTテレビ診断結果をふまえながら考察。

●アニメーション番組が描く『行為』

の分析、香取淳子、放送レポート、83年5月号、PP16-20。

ギャグアニメとSFアクションについて、FCTテレビ診断結果をふまえて考察。

●老人にとってテレビとは何か、香取淳子、放送レポート、83年7月号、PP50-54。

358人の老人から得られた回答をもとに、老人のテレビ視聴行動を視聴時間を軸に考察。

●子どもに「みどり」を、荒垣秀雄 vs 金沢嘉市、子どもの文化、83年4月号、PP14-21。

子どもにとっていかに緑が必要か、自然の必要かを、自在な対談の中から訴える。

●テレビと子どもの健康、『市民活動』第27号、83年3月、P5。

FCTの報告書、テレビと子どもの健康が、写真入りで詳しく紹介されている。

●戦後青年の意識と制度構造、諸橋泰樹、和光大学人文学部人間関係学科学卒業論文

70年、75年、80年の青年の比較を通し、意識の変遷をみる。

●子どもとテレビのいい関係、ミセス、83年5月号。

子どもとテレビの関係には母親が果している役割が大きな影響力をもつ、というところから、インタビューを三善晃、富士真奈美の両氏に試み、「子どもとテレビ我が家の場合」を語ってもらっている。これをうけて母親の立場から竹内希衣子の提言、母親への提言として詫摩武俊、深谷昌志、佐藤忠男の諸氏が述べている。

(文責・香取淳子)

